日本・イラク学術交流10周年共同シンポジウム、イラク国内で開催

研究代表者　酒井　啓子
共同研究者（①氏名、②フリガナ、③ローマ字表記、④所属部局名、⑤職名、⑥専門分野）
①山尾　大、②ヤマオ　ダイ、③Yamao Dai、④九州大学、⑤准教授、⑥イラク政治

酒井　啓子　Sakai Keiko

千葉大学法政経学部教授
専門分野：イラク政治史、中東現代政治
1982年東京大学卒業後、アジア経済研究所入所。日本で初めての現在イラク政治研究者となる。湾岸戦争、イラク戦争などに関して、メディアにも積極的に発信。2012年から千葉大学にて「中東政治」を教えている。近著に「移ろう中東、変わる日本2012-2015」（みすず書房）がある。

—— どのような研究内容か？

イラク戦争後の2005年、それまで国連の制裁下にあって国際的に孤絶していたイラクから、あるイラク人歴史家が来日しました。初めて見る日本に彼は強く感銘を受け、イラクで日本研究を開始しようという強い思いをもって帰国します。大戦後に平和国家として復興を遂げた日本をモデルとして学びたい、という熱意が、彼を突き動かしたのです。一方で、これまでイラクの現代政治研究を行ってきた酒井は、そのことに強く共鳴し、自分の研究がイラクの戦後復興になにか役立てないか、と考えました。二人は、2005年からほぼ二年毎に日本・イラク共同研究ワークショップを開催してきましたが、治安上の問題から、イラク国内では開催することができませんでした。それが、2015年12月、日本企業の進出も見られるイラク南部の港湾都市、バスラでようやく実現しました。日本研究を切望するイラク人学者たち80人以上が集まり、初めて日本人学者と熱い議論を交わしたのです。

バスラで行われた日本・イラク共同研究ワークショップ
（2015年12月14日）

—— 何の役に立つ研究なのか？

次々に紛争を経験してきたイラク人にとって、戦争で疲弊したイラク社会をいかに再構築するか、紛争を脱却し平和構築を実現するかは、深刻な課題です。第二次大戦後に復興した日本にその答えがあるのでは、と彼らは考えているのですが、国際的に孤立してきた彼らは、これまで全く日本研究を行う機会に恵まれませんでした。彼らに日本研究支援の手を差し伸べることは、なによりも世界平和に大きく貢献するはずです。

また、イラクの現状を知ることは、日本にとってもグローバルな世界のなかでどのように平和を模索していくか、考える材料になります。イラクの現地史資料に日本のイラク研究者がアプローチすることは、日本ばかりか世界のイラク研究に大きく貢献することになるでしょう。相手の国を正しく理解しなければ、その国への外交関係も正しく築くことができません。

—— 今後の計画は？

イラク国内では、つぎつぎに「次回はうちの大学で」と、共同開催校が名乗りを上げています。それだけ、日本の学界への期待が高いのです。この期待を裏切らないよう、今後も

イラク国内での開催を、治安情勢などに留意しながら模索しているところです。また、より多くのイラク人研究者に日本の実態を視察してもらいたいと考えています。

── 成果を客観的に示す論文や新聞等での掲載の紹介

このイラクでの初めての日本・イラク間学術交流は、日本のNHKでも大きく取り上げられました。
▶キャッチ！インサイト 「日本・イラク学術交流の意義」

また、現地大手アラビア語日刊紙「アッザマーン」紙は、2016年１月12日に文化面一面を割いて、シンポジウムの様子と成果、それに関わる在イラク日本大使の挨拶などについての記事を掲載しました。
▶「アッザマーン」紙 2016年１月12日に文化面一面

── この研究の「強み」は？

中東の紛争地域は、どうしても現地からの情報を直接得たり、現地の研究者と対面で交流することが難しくなります。そのため、欧米の中東研究はどうしても中東から欧米に移住した人などからの「伝聞」に頼りがちです。ですが、現地の研究機関と直接良好な研究交流関係を確立すれば、ナマの現地社会の実態を知ることができます。伝聞や憶測に頼るのではなく直接相手の社会に向き合うことが、日本の地域研究の強みであり、誤解や偏見に惑わされずに研究を進めることができます。

── 研究への意気込みは？

繰り返し戦争の被害を受けてきたイラクでは、これまでの空白を埋めるように世界の知識を渇望しています。彼らに日本からの知的発信を行い、学術協力を進めることで中東で平和への芽を育むことができれば、研究者として本望でしょう。ぜひ日本とイラクの学術交流を続けていきたいものです。

── 学生や若手研究者へのメッセージ

紛争に苦しむ人々に何かしたい、でも治安が悪くて何もできない、といらだちを感じる人たちも少なくないでしょう。そんななかで、まずはその地域の現状を知ることは大きな一歩です。第三者の目を通すのではなく、現地社会の人々が書いたものを読み、発信するニュースを見て聞くことは、相互誤解を解消するために重要です。言葉の力と想像力を、研ぎ澄ませてください。

同ワークショップで主催者のバスラ大学総長から記念の盾を授与される酒井教授